News Letter
ウルトラの星
2024.12
196

認定 NPO 法人
コミュニティリーダーひゅーるぽん
こども発達支援センター・就労継続支援B型事業所ぽんぽん
まちづくりボランティアセンター・アートサポートセンターひゅるる
〒731-0102　広島市安佐南区川内 6-28-15
Phone.082-831-6888/Mail.info@hullpong.jp

今月のとぴっくす

8月23日「なつまつり」
それから秋にかけて
たくさんの笑顔と出会いがありました

目を輝かせて楽しみにしてくる子どもたち
「どきどき！わくわく!!」
みんなが心躍らせる ひとときに込める思い

なつまつり

なつまつりは「地域の方とつながり、交流する場　子どもたちが楽しめる場」として毎年企画しているものです。

このなつまつりで地域の子どもたちと少しでも交流できるためのツールとして使っているのが「シールラリー」。今年は「はたらくくるま」シリーズで、スタッフがそれぞれ車の絵を名札につけ、みつけてくれたこどもとおしゃべりしながらシールを渡していきます。これまでも「妖怪」「恐竜」と毎年こどもたちの流行りをとりいれながら作っています。

そしてなんといってもメインイベントは「お化け屋敷」です。例年入り口に入場者の列ができるほどの大人気です。

「去年はうちの子泣いて入れなかったけど、今年ははいれました～」というママの声や「全然怖くなかった！！(?)」と必死に話をしてくれる子どもなど、きっと夏の楽しい思い出になったことでしょう。

そのほかワークショップやカフェ、飲食や遊びコーナーなど、こどもたちが楽しめる空間を作り、夏の夕暮れの中、コロナ明けの昨年以上にたくさんの方が足を運んでくださいました。さらに、向かいの料亭の魚長さんをはじめ、エブリイ緑井店さん、衣料品のGAPさんなどが、出店協力、あるいはボランティアとしてお祭りを盛り上げてくださいました。楽しさを共有する中でたくさんの交流が生まれたなつまつりでした。

地域イベント

11月3日は、安佐南区民まつり、9日は、さとうふれあいまつりに参加しました。

区民まつりでは「焼き！肉まん」とぽんぽんのグッズ販売を、ふれあいまつりではきっずぐみの子どもたちとともにジュース販売と遊びのコーナーを出店しました。

たくさんの方に楽しく私たちのことを知っていただく時間になりました。

やきいも会

11月16日の地域食堂「みんなおいでや」では、佐東公民館で活動される「おやじの料理」さんのご協力をいただいてやきいも会もしました。

持って来てくださる手作りの焼き芋機で焼き上がる焼きいもは大変好評で、50キロのさつまいもはあっという間に売り切れました。

ほくほくおいしい焼き芋で秋のひと時を満喫しました。

秋の夕暮れコンサート

11月22日、城南中学校吹奏楽部のみなさん、「into」さん、ひよこ組の保護者のみなさんに、素敵な音楽を奏でていただきました。地域の人と一緒に過ごす楽しくゆったりとした時間。音楽の力が人をつなぐ、そんなコンサートでした。

www.hullpong.jp

Message...

つながる力

「昔の日本人は、煩わしさの中にこそ人とのつながりと助け合いが存在することをよく理解していて、煩わしさを互いに受け入れ合うことで、人として成長し器を大きくしてきたのではないでしょうか。子どもたちの貧困の本当の原因は、実は煩わしさの中にある人とのつながりと助け合いを手放してきた僕たちの中にこそあるのではないだろうかー。」

これは、12月6日の中国新聞セレクトで見つけた美野由人さんとおっしゃる方が書かれた文章の一節です。心の底から「ああ、その通りだな」と感じつつも、最近になってなんとなく「煩わしさ」を「受け入れる」ことに対して構えてしまおうとする自分があることに気づきます。不寛容な社会といわれるようになって久しいですが、ともすると、安全で万全、完璧を期すことはあたりまえ、人に迷惑をかけたり不快にさせるなどもってのほかという風潮の中で、「煩わしさ」が生じることを避けなければという異様な緊張感のようなものが徐々に染みついてきたような気がします。また、それが「行動」や「挑戦」を萎縮させているのでは、とふと感じることもあります。

1982年6月12日。
ニューヨークで開催された第2回国連軍縮特別総会にあわせて、世界中から100万人もの市民が集い反戦・反核のデモ行進を行いました。日本からも、様々な反戦・反核の運動体がひとつの大きなうねりを形成し、世界中の人とともにこの行進を行いました。当時大学2年生だった私は、熱心な平和運動家でもあった広島YMCAの総主事相原和光さんに連れられてその行進に参加させていただきました。その時の体験、そこで感じた熱気と声に、この市民の一歩が社会を変えていくのだと感じました。渡米させていただいた私の役割はもうひとつありました。それは、同年に制作された「にんげんをかえせ」という、いわゆる10フィート映画を現地の教会等、いろいろな場所で上映をすることでした。その後もいろいろなかたちで私たちに温かい声をかけてくださった被爆者のお一人、故沼田鈴子さんとの初めての出会いは、この映画の中でもありました。さて、その映画をご覧になった方々はというと、どの会場でも一様に言葉を失われ、ため息をつき、そして涙され、「ほんとうにこんな残酷なことが起こったのか？」「原爆とはこんなに恐ろしいのか」という感想を漏らされることがほとんどでした。しかし、シアトルのある会場では、大変冷めた声で「日本だってひどいことをしたじゃないか。日本だけが戦争被害者のように伝えるこの映画には賛同できない。」とおっしゃった方がいました。心に突き刺さる声でもありました。そしてその数日後にはハワイでの上映会。ため息をつきながらご覧になられるハワイの方々。上映後、静まりかえった会場で固唾をのみながら感想を待っていた私に飛び込んできた最初の声は「祈りましょう。ともに手を取りあって世界の平和のために行動しましょう。」という言葉でした。

2024年12月。みなさんご存知の通り、日本原水爆被害者団体協議会（被団協）がノーベル平和賞を受賞されました。被爆者のみなさんの歩みがこうして「平和賞」というかたちで讃えられたのは、本当によかったと感じます。心より敬意を表したいと思います。高齢になられた被爆者お一人おひとりにとっても、大きな励みとよろこびにつながったように感じました。沼田鈴子さんが、「（アメリカの記録に残っていた自分の姿を）映画で見られるのはいやだったんよ。」と話してくださったことがあります。その後沼田さんは、その映画がきっかけになり、語り部としてものすごいエネルギーで活動をされたのはみなさんもご存知の通りです。今になってこの言葉を思い出し、「ああ、そうだったのか」と思うことがあります。それは、平和運動に携われる被爆者の方はみな「自分のつらい体験」を「繰り返し繰り返し」話されてきているということです。今さら何をと思われるかもしれません。しかし、自分に置き換えてみた時に、大切な家族や友人が亡くなられたこと、しかも壮絶なかたちで、なすすべもなく亡くなられたことを語る、伝えるということができるだろうかと思うのです。どれもが、悲しくつらい思い出です。自分なら、記憶の片隅にしまっておきたいと考えるかもしれません。言うまでもなく、その記憶の箱を開け伝えるにはものすごい勇気と決断がいることだったに違いないと思うのです。語り部といわれる方々は、その活動を連日のように行ってらっしゃるのです。被爆者であることが差別や偏見を生む社会の中にあって、さらに、受賞演説でも強調されたように「未だ犠牲者の国家補償がない」風潮がある中で、自らのつらい記憶を平和の希望へと変えて歩んでいらっしゃったことに大変頭が下がります。おそらく、「煩わしさ」というような言葉では全く足りないような壮絶な決意とくじけない歩みがあったに違いありません。「核兵器廃絶、平和な社会の実現」その一点に向かう力強い歩みの歴史すべてが、今未来へ残しつなげていくメッセージとして讃えられているのだと感じます。

幾年かの時代を経てその行動の意味や重みが分かり、社会を動かすことは多々あります。「人類が核兵器で自滅することのないように」という言葉、本当に重く響きました。指導者、そして国は動かなくてはいけない。そしてもちろん後を託された私たち市民も力強い一歩を踏み出さなくてはならない時だと思います。そしてその言葉に重ねて、ふと地域、自身に目を向けたとき「煩わしさを互いに受け入れ合い成長することの大切さ」を感じるのです。「つながりと助け合いを手放すことで自滅することがないように」と。
新しい年。
つながりの中で、寛容で優しい社会を創る私、そして私たちでありたいと思います。

川口隆司

特集

「地域共生社会」と私たち その2

相談支援専門員　西廣弥希
うるとらのほし特集チーム

前号では「地域共生社会」の大まかな仕組みに関して説明を行いました。ひゅーるぽんでは地域づくりの一環として地域の子どもたちに施設を開放し交流する「わくわくきっず」と「地域食堂みんなおいでや」の取り組みを行っています。顔が見える関係を紡いでいくことが目的です。今号では、この二つの活動を取り上げます。

まず「わくわくきっず」ですが、毎週木曜日の放課後と長期休暇中の決まった時間を使って行う、きっず組の子どもたちと地域の子どもたちとの交流の時間です。２０２３年12月に開始し、回を重ねていく中で、毎回のように楽しみにきてくれる地域の子どもが増えてきました。楽しい遊びの時間に参加するというだけでなく、片付けや掃除までが自分たちの活動なんだと認識できる子が出てきはじめたり、「地域食堂みんなおいでや」へ他の友だちを誘ってくるなど、活動内容にも変化が生まれてきています。

毎月第三土曜日に行なっている「地域食堂みんなおいでや」は、スタッフ、保護者・家族、通所者、関係者が一緒になって行う活動です。もちろん、きっず組子どもたちも、会場の椅子や机を運ぶ等、大人と一緒に活動します。当初はスタッフが中心となって他のみなさんにお手伝いをお願いをするという形態でしたが、こちらも少しずつ協力してくださる保護者・家族、ボランティアが増えて行く中で活動の変化が見られるようになりました。「もう少しこうしたらよかった」「今回は新しい人が多かったよね」「もう少し子ども向けのメニューにしよう」「暑いからデザートに冷たいものを出しても

いいかも」等、活発な反省会の意見を聞いていると、関係者全員が活動主体者となって動いていることを感じます。あわせて、楽しく談話される姿に関係の深まりも感じています。

こうしたみなさんから改めて感想を聞いてみると「夫がおいでやに誘われたので、自分も参加してみようと思った。他の保護者にやり方を教えてもらいながらするのが楽しくて、継続して参加している。」「職場では、子どものことをあまり話せない。おいでやで、同じ境遇の悩みを話せるので、自分にとっては第３の居場所になっている。」「最初はひゅーるに何かできればという、恩返しの気持ちから参加していた。でも今は、参加している人たちとなんでもない話をするのが楽しくて参加している。」「休日に趣味をしたりするのは気が引けるけど、おいでやだと子どもに関することなので、気兼ねなく参加でき楽しんでいる。」「毎回楽しくて参加している。保護者、家族の人と話すのがとても楽しい。」等、「おいでや」という場を通し、主催する側にも新たな人間関係やつながりが生まれていることを感じます。

もちろん、食べにきてくださる地域の方の中からも「第三土曜には、おいでやにくることが定番になっている。」「子どもがチラシを持って帰り、行きたいとのことで来てみた。」など活動の浸透を実感する声も聞かれるようになりました。

こうしたことも踏まえ、改めてスタッフの間で「地域共生社会」について話し合いの場を持ちました。その中で出た意見を挙げてみます。「そもそもなぜ地域共生社会を謳うようになったのか。」「人とのつながりを持つことが必要と伝えることが目的ではないか。」「結局はつながりがないと、寂しさを埋めることはできないのではないか。」「つながりを持つことが当たり前の世代は、その気持ちは続くが、つながることの心地よさや大変さを、若いうちから経験できる社会にしていくことが必要だと感じる。」「デジタル化で、世の中が孤独に導いていると思う。その中で地域共生社会を謳うのは矛盾していると感じる。」「共働きも増えてきているので、おいでやという場があることで、寂しい気持ちも少しは無くなるのではないか。」「わくわくきっずで来てくれている子が、外ですれ違った時に声をかけてくれることが多くなった。」「いざという時に、頼れる関係性を作るのが共生社会ではないかと思う。」「煩わしいと思う関係性が、大事だったのかなと思う。顔を知っている、小さい関係性から始まるのではないかと思う。」など、幅広い年齢層のスタッフ間で、たくさんの意見が出ました。「人とつながっていないと寂しさを感じる」「一人では生きてはいけない」という意見から、「なんらかの形でつながりを持つことが大切である」という地域共生社会を意識する声へとつながりました。

現在社会では、多様性が大切にされる中で孤独を感じる人、孤立していると思える人も増えてきています。一方で、これは個人の責任ではなく、社会の変化によってもたらされた状態ともいわれています。核家族化、単身世帯の増加、働き方の多様性で一人の時間が多くなったこと、ＳＮＳの発達に伴い非対面の関係が日常化してきたこと、プライバシーへの配慮など、孤独・孤立の状態が社会から見えなくなり、そのことが、孤立から生じる課題を複雑化させています。子育て世帯に関しても、孤育てが進み、虐待につながる可能性が高まったり、虐待が潜在化しやすくなったりしています。

地域共生社会という考え方は、共助の力で社会の持続性を高めていくことにつながるものだと思います。地域住民として助け合い活動に参加する、公的サービスのお世話にならないようになるべく努力をするという社会全体の風潮が広がると、そこに加われない人にとっては、ますます孤独・孤立を深め、問題を見えなくしていく可能性があります。そうした中で、住民・市民のレベルでできることは何かを、わたしたちの視点で考える必要があると思います。

「ひゅーるぽん」では、心の通う「つながり」づくりをすすめています。そこには、サービスを提供する人、サービスを受ける人という関係性を超えた、「助け合い」「お互い様」が感じられる場になることを意識して行っています。今各地で立ち上がっている、地域食堂や地域カフェ、百歳体操等の活動でも同じ思いで活動をされているように感じます。地域の交流の場があること、さらにはそこからもう一歩踏み込んで顔見知りになり、人間関係が作られていき、深まっていくこと。支え手、持続性の課題は確かにありますが、今こうして動いていることが、次の世代を巻き込み受け継がれていくことへとつながることを期待します。

最後に、子どもたちの育ちを応援する場としてのひゅーるぽんでは、人と活動を共にすることに気持ちが向き、社会を豊かに創造していくいわゆる「社会力」を持った子、ボランティアを育てていくことを大切にしています。それぞれ地域、団体の強みを生かして、未来に向かう豊かな心を持った子どもたちを育てていくことがあわせて大切だと思います。

www.hullpong.jp

このニュースレターを音声で聴いていただけるようになりました！しかも、音声ならではの仕掛けつきです。ぜひ、こちらからどうぞ

お知らせ

●夏のボランティア体験プログラムが終了しました

今年は２９名の高校・大学生のボランティアさんが来てくださり、夏休み期間中子どもたちと関わってくださいました。
もちろん夏休み期間中だけでなく、ひゅーるぽんでは１年中ボランティアの受け入れを行なっています。希望される方はぜひ、メールか電話でお知らせください。

●広島市ピースアートプログラム アート・ルネッサンス 2024（報告）

9 月 28 ～ 10 月 6 日の間、今年も皆さまのご支援・ご協力により開催することができました。
県内外から 1,100 名を超える来場があり盛況に終わることができました。また今年は無印良品さんや心身障害者福祉センターでの展示の機会も頂き、アーティストのみなさんの多様な表現活動が社会にまたひとつ広がったように思います。ありがとうございました。

展示作業の様子とロボットを使った遠隔地からの鑑賞サポート

●地域食堂「みんなおいでや」

毎月第３土曜日　11 時半～なくなり次第終了
大人 300 円　子ども 100 円（誕生日月の方は無料です。）
みんなおいでや～♪

●「一体型プロジェクト報告会」

2025 年 2 月 7 日（金）14:00~16:30
私たちが運営するアートサポートセンターひゅるると広島県、広島大学、広島県立美術館が協働して、障がいのある人たちの文化・芸術活動への参加について実践、研究を行っています。これまで、鑑賞、表現に関するアンケート調査、県立美術館を会場に障がいのある人を対象にした対話型鑑賞会の実施、さらには、県立美術館へのアクセシビリティを高める「利用案内動画」の作成などを行ってきました。世界の潮流となりつつある「DEAI」《Diversity（多様性），Equity（公平性），Accessibility（アクセシビリティ），Inclusion（包摂性）》社会につながる取り組みでもあります。その一部は世界的な学術誌「 International Journal of Art & Design Education」にも評価され、掲載されています。これまでの歩みとその成果、可能性について、それぞれの担当者の視点でわかりやすくお話ししていただきます。オンライン開催ですので、興味のある方はぜひご参加ください。詳細は、右アートサポートセンターの WEB からどうぞ。

●ぽんぽんアートが海を渡ります！

2025 年 1 月よりぽんぽんのアーティスト斉藤亮さん、福田翼さんのアートが韓国の漢陽（ハンニャン）大学主催のアート展で現地の障がい者アート作品とともに展示されることになりました。もちろんふたりのアーティストも現地に向かいます。国を超えた文化交流の始まりに私たちもドキドキしています。

あなたにありがとう

2024.06 ～ 2024.11 月

■正会員・賛助会員

みずえ緑地株式会社 正本大、特定非営利活動法人かぞくの家さくら 岩本敦子、特定非営利活動法人工房尾道帆布、濱部直樹、山口将平、松野真理子、小川勝則、上村一相、佐野和輝、斎藤元浩、猪飼亮、井上大輔、山本和也、橋本裕人、中本隆秀、藤原麻希、福島あゆみ、手島秀昭、金子涼一、秋田訓宏、森山学、小野啓太、JIN ZHENYU、山田剛志、下垣内治登、友重浩司、岡本哲司、志茂洋二、宮庄浩司、加藤直規、山口道子、職員 18 名、匿名 41 名

■ご寄付

特定非営利活動法人 ANT-Hiroshima、株式会社広島銀行古市支店、株式会社 NTT ドコモ中国支社、株式会社竹野工業、株式会社アイランドオート、株式会社インシストコーポレーション、司法書士法人髙尾事務所、特定非営利活動法人蘖今井おとね、祇園地区民生委員児童委員協議会、株式会社 BOAZ、広島信用金庫、綜合エナジー株式会社、カフェぶどうの木沖本博子、鬼頭恵美子、鬼頭純平、小野塚剛、金子涼一、秋田訓宏、志茂洋二、小野啓太、JIN ZHENYU 下垣内治登、友重浩司、宮庄浩司、岡本哲司、山田剛志、森山学、新英二、加藤直規、平木久恵、藤崎美穂、胡子秀美、山口道子、匿名 24 名

■物品のご寄付

○　地域食堂（おいでや）へ
志茂洋二、秋田訓宏、山田剛志、瀬尾圭史、森山学、星野翼、門田修、匿名４名（地域食堂食材他）
○　その他
岡本晴美民生委員児童委員（画用紙）

（敬称略・順不同）

「モノの量と家事の量は比例する」という記事を読みました。。つまり、便利そうに見える調理器具はたくさんあるけど、それが増えれば増えるほど家事は増えるというお話でした。利便性追い求め、気がつけばあふれるモノの中で暮らす現代。その中で失ったものはないか。もっと、シンプルいや、もしかすると足らないぐらいの方が人間は優しくなれるのではないか。新しい年が優しさであふれますように。(T)

賛助会員
Hull Fan 年間 4,000 円
お申し込みは www.hullpong.jp から
クレジットカード等もご利用いただけます

私たちの活動は
あなたのおこころざしで
もっとあったかく
やさしくふくらみます
ぜひ私たちを支えてください

このご寄付は税制上の優遇を受けることができます

think different for happiness.
www.hullpong.jp
この子らと世に光を
発行者：認定 NPO 法人ひゅーるぽん
発行日：2024/12/20（年２回発行）
ひゅーるぽん会報”うるとらのほし”